



同社で生産しているさまざまな継手部品。

顧客ニーズにすぐ応えられる技術と納期の重要性

「継手を製造されているとのことですが。」

継手というのは、要するに2つの機械部分を接続する器具です。英語でジョイントと言います。例えばガス管とガス管を接続する部分などに使われますね。中にバルブを入れて、逆流を防いだり漏れを防止するものも、あります。流体継手にはいろいろなものがありますが、私どもで製造しているのは、中に流体（液体や気体、粉体などの総称）を通すための継手です。

私どもでは日東工器株と資本関

宇都宮市内で「ものづくり」や「商品開発」などに力を注ぐ「未来志向型企業」の経営者にご登場いただき、取り組みをお話しいただく本コーナー。第4回は、管をつなぐ鉄管継手や流体継手などの製造を行なっている、箕輪製作所の箕輪祐之社長です。

箕輪製作所代表取締役社長 箕輪祐之



係にあり、同社の製品「カブラ」シリーズを生産させていただいております。もちろん、他の会社からの受注もありますので、現在100以上のアイテムを製造しています。

「設立当初から継手製造だったのですか。」

いえ、先代が設立した当初は、自動車部品の製造などを行なっていました。現在は継手の製造が業務全体の約8割ですが、もちろん自動車関連の部品も製造しています。

「一般の人にはなじみが少ない継手ですが、製造の難しさはどのようなことでしょうか。」

作り方としては、素材を切削していくのですが、素材の種類で刃物を変えなくてはいけない。ところが、あまり手がけたことのない素材を使う場合には、適切な刃物や削り方を、試行錯誤で見つけなくてはなりません。

もちろんベテランスタッフも多いですし、また過去のデータはコンピュータにデータベース化していますから、まったくゼロから試して行くわけではありませんが、やはり苦労はありますね。

Information



箕輪製作所 本社社屋

「震災やタイ水害の影響などは、いかがでしょうか。」

震災の際には、会社のスタッフや設備については、ほとんど被害はありませんでした。自動車関係については受注に影響が出ましたが、7月くらいまでには回復しましたね。継手は特に大きな影響は無かったと思います。むしろ、計画停電の方が、いろいろ大変でした。

タイ水害の影響で二時期、継手の受注が増えました。現在も実は継続しているのですが、設備に限りがありますから、痛し痒しということも、あります。それに、経営者としては、タイでの生産体制が回復した後のわが社の受注についても、いろいろ手を打つ必要があるでしょうから、喜んでばかりもいられないのが、実際のところですね。

「大手企業の海外への拠点移動や、安い海外製品の流入などは、製造業全体の問題ですね。」

そうですね。コスト競争に巻き込まれたくないのですが、グローバル化は否応無く攻めてきます。ただ、短納期や少数生産、高精度の要求などについては、まだアドバンテージがありますから。打ち合わせの時に「え、そんなもの、できるのか」と思うような要求でも、全力をあげて応えることで、取引先からの信頼をいただいていると思います。

「今後の抱負をお願いします。」

ひとつには後継者の育成ですね。私ももう54歳ですから、そろそろ始めておかなくては。それから、海外の安い製品に対抗できる企業体質、生産体制の確立ですね。